

# 楔形文字と漢字かな混じり文

— シュメール語と日本語の表記法について —

峯 正 志

## 1 はじめに

日本語は従来から特殊な言語であると言われてきたが、最近では言語類型論の発達により、言語的にはごく普通の言語であると認識されるようになってきた。しかし、日本語を表記している文字の面から見ると、依然として日本語は世界の言語のなかで特殊な位置をしめていると言える。<sup>1)</sup> その特殊性のうち代表的なものは、表語文字と表音文字を同一文中に混在させて使用しているという点であろう。

しかしながらそのような特殊性も歴史上全く例のないことではなく、既に4000年前のメソポタミアで、日本語と類似した複雑な表記法が行われていたのである。このことは、従来はあまり認識されていなかったようであるが、最近是一般向けの書籍にも楔形文字法への言及が多く見られるようになった。<sup>2)</sup>

しかし、それらの記述は、楔形文字の体系の一部分の紹介であったり、日本語との断片的な比較であったりして、楔形文字の表記法と日本語の表記法の包括的な比較とは言いがたい。

また、楔形文字は古代オリエントの様々な言語の表記に用いられていた。代表的なものをあげればシュメール語、アッカド語、ヒッタイト語などがある。当然のことながら、同じ楔形文字を用いてもそれぞれの言語間で用法にかなりの差異がある。しかし、それらに対する正確な認識も、一般にはまだ広まっていないように思われる。

従って、楔形文字一般の表記法と日本語の表記法の比較ではなく、楔形文字を用いるある特定の言語の表記法との比較が必要であるように思われる。そこで、本稿ではそのような古代オリエントの諸言語の中からシュメール語を選び、<sup>3)</sup>シュメール語の表記法と日本語の表記法とを比較して、その共通点と相違点とを明らかにしようと思う。<sup>4)</sup>

## 2 シュメール語の言語的性格と楔形文字資料

日本語の表記法との比較に入る前に、シュメール語の言語的性格と楔形文字資料について概観しておくのが有益であろう。

## 2・1 シュメール語の言語的性格

シュメール語は膠着的な言語であって、名詞や動詞は語形変化を行わない。<sup>5)</sup>名詞の格関係は接尾辞で表すが、動詞の場合は(接尾辞もあるが)接頭辞のほうが発達しており、接頭辞が連なって定動詞ができる。単音節の語が多いが、2音節以上の語もかなりある。基本語順はSOVなので前置詞でなく後置詞(接尾辞)を用いるが、形容詞や関係節や属格名詞は名詞の後から修飾する。いくつか例文を挙げてみよう。

- (1) En-te-me-na ensi-Lagaš -ka -ke, En-a-kal-le ensi-Umma<sup>ki</sup>-da  
 人名 「総督」 地名 格語尾 格語尾 人名 「総督」地名 格語尾  
 ki e -da -sur (Entemena Cone A, I. 36-42)  
 「地」接頭辞 「測る」

「ラガシュの総督エンテメナは、ウンマの総督エンアカルラと共に測量した。」

- (2) e -bi íd-nun-ta gú-edin-na-šè íb -ta -ni -è  
 「運河」[その] 河川名 格語尾 地名 格語尾 接頭辞 接頭辞 接頭辞「出す」  
 (Entemena Cone B, II. 12-14)

「その運河を、イドヌンからグエディンナまで流した。」

(図1に楔形文字を示す。)

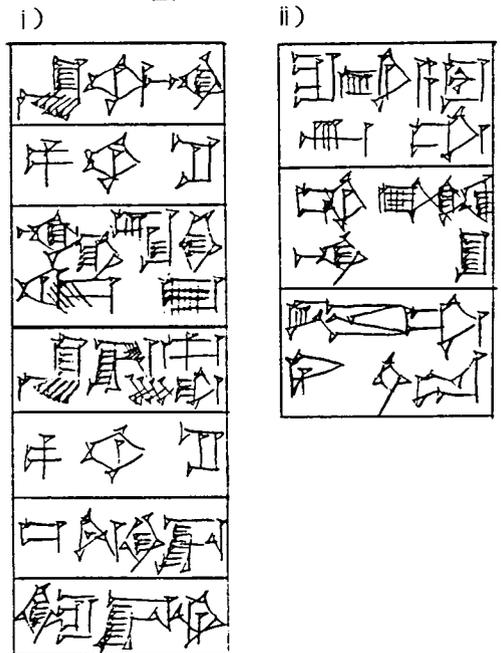
シュメール語は楔形文字を表音的にも表語的にも用いていたが、シュメール語の持つこの接頭辞や接尾辞の豊富さは、楔形文字の表音的な使用法の始まりと無縁ではあるまい。<sup>6)</sup>

## 2・2 シュメール語の楔形文字資料

シュメール人自身の残したシュメール語の一次資料は、大部分が行政経済文書である。それらは図2に見られるように、通常丸みを帯びた四角形で、大きさは手のひらに乗るぐらいの大きさである。これに stylus (英語) と呼ばれる葦のペン(シュメール語で gi-dub-ba 「粘土版の葦」)で、粘土に押しつける様にして文字を書くのである。<sup>7)</sup>

粘土版は通常、線によって、コラムと行に分けられている。<sup>8)</sup>名詞句単位(いわゆる文節)で行が区切られるけれども、勿論、必ずそうになっているというわけではない。このことについては、第3章の中で触れる。

図 1



### 3 日本語との共通点及び相違点

図 2

佐竹(1989)は、日本語の表記の特徴として、

- 1) 表記に使う文字体系の種類が多く、また、文字の数も多い。
- 2) 分かち書きをしない。
- 3) 縦書きと横書きとの両方が行われている。
- 4) 語表記に多様な表記法が存在する。

の4点をあげている。

これを出発点として、シュメール語と日本語の表記法の比較を行ってみたい。

1) は簡潔に書いてあるけれども、このことは多くのことを言外に含んでいる。まず、文字体系が多いということは表語文字と表音文字の混用が見られることをも含んでいる。

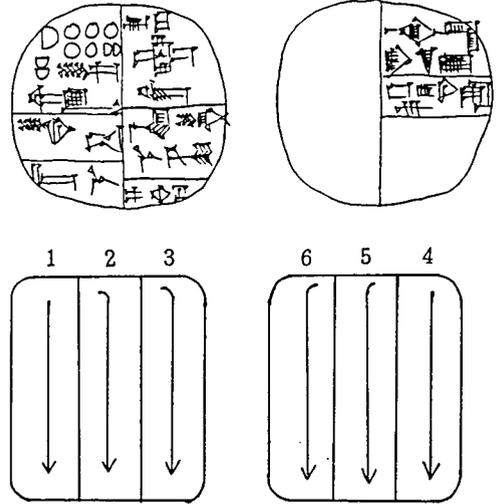
そして、表語文字を用いていることから、使用する文字の数も多いのである。さて、表語文字と表意文字が混用されるという点は、シュメール語・日本語で共通している。名詞、動詞、形容詞といった、いわゆる content word (実質語) は表語文字で表し格語尾や動詞接頭辞といった、いわゆる function word (機能語) は表音文字で表すのである。このことは、日本語が、実質語は漢字で、機能語はひらがなで表すのと平行している。楔形文字が漢字かな混じり文と似ていると言われることがあるのも、このことが理由なのである。

しかしながら、その表語文字と表音文字の混用の仕方は、両者の間で大きく異なっている。日本語のほうは1種類の表語文字(漢字)と2種類の表音文字(ひらがな・かたかな)という3つの異なった文字体系を混用しているのに対し、シュメール語のほうは楔形文字という1つの文字体系を表語と表音に両用しているのである(従って上で用いた「実質語は表語文字で表し、機能語は表音文字で表わす」という表現は正確ではない)。このことについては、この章の後半部分でもう一度触れる。

佐竹(1989)では挙げられていないけれども重要な日本語表記上の特徴の一つに、一つの文字が、多くの読みや意味を持っているということがあげられる。例えば、図3の文字は、口の部分に斜線を引いた人間の頭の絵か

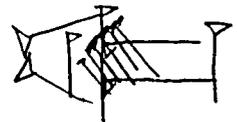
Fö 10 表

裏



表を読んだら上下に裏返す。

図 3

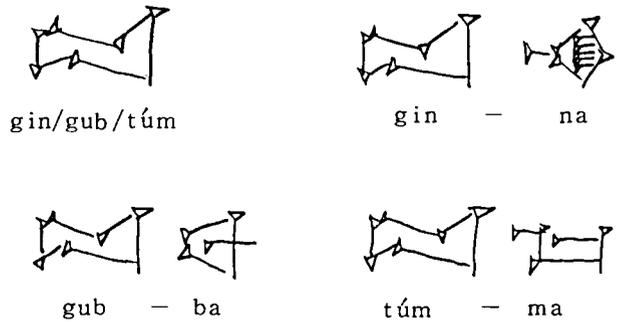


らできた文字であるが、この文字は実に多くの単語を表すのに用いられる。ka と読めば「口」を表し、kir<sub>4</sub> と読めば「鼻」を表し、zú と読めば「歯」を表し、inim と読めば「言葉」、「命令」を表し、du<sub>11</sub>（または dug<sub>4</sub>）と読めば動詞「言う」「話す」を表す、といった具合である。

その結果、文字の読みや意味を限定するための送り仮名や振り仮名が存在していることも、両者で共通している。（もっとも、一般の行政経済文書では振り仮名はほとんど見られない。<sup>9)</sup>）

日本語の送り仮名に相当するのが phonetic complement（音声補語）と呼ばれるものである。これは、子音で終わるある語に母音で始まる文法要素が接辞される場合に起こる。例えば、図4中の文字は多義的に用いられる文字で、gin「行く」、gub「立つ」

図4



túm「運ぶ」などの動詞を表すのに用いられる。もし、これらの動詞の後に母音で始まる要素が続かなければ、文脈から、どの動詞が用いられているのかを判断しなければならない。しかし、もし母音で始まる文法要素が後続すれば事情は異なる。例えばいわゆる名詞化の -a が後続した場合には、図4に見られるごとく、この文字がどの動詞を表しているのかを明確に表すことができるのである。「行く」の場合には gin-na, 「立つ」は gub-ba, 「運ぶ」は túm-ma という具合に、接尾辞 -a は前の動詞の末尾子音と共に表記されるからである。<sup>10)</sup>

しかし、これも、意味の限定にのみ用いられるわけではない。次の例では読み誤ることのない箇所にも音声補語が現われている。

(3) Urukagina Cone C, 32-36

ki-sur-ra-<sup>d</sup> nin-gír-su-ka -ta a-ab-šè maškim-di e -gál-lam  
 「境界」 「ニンギルス神」 格語尾 「海」 格語尾 「？」 接頭辞「置く」接尾辞  
 「ニンギルス神の境界から海まで、マシュキムディ(?)を置いていた。」

最後の接尾辞は -am<sub>6</sub> であるが、音声補語として -lam と表記されたわけである。ここでは直前の動詞の読みは明らかなので、本来はこのような表記は必要ではない。事実、他の箇所では、子音で終わる動詞の後でも -am<sub>6</sub> として現われている。書記の気紛れか、または他の理由があるのかもしれない。

文字の読みや意味を限定するためのもう一つの手段として、限定符(determinative)

が存在する。例えば、「鋤」を表す文字は、名詞としては「鋤」「耕作者」、動詞としては「耕す」を表すが、もしこの文字の前に「木」を表す限定符が置いてあると、その文字は「鋤」を表していることになる。

また、エンリル神を表す文字に「神」を表す限定符が前置されると「エンリル神」の意味となるが、「土地」を表す限定符が後置されると nibru と読み、「エンリル神」を主神とする都市、ニップールを指す<sup>11)</sup>(図5参照)。これは機能的に漢字の偏に当るものであると思う。ただ書記材料の関係で、一語の形にはならなかったものと思われる。

日本語では一つの語に複数の表記法が存在するが、シュメール語でも同様である。

表語文字で表すものは表記法が比較的安定しているが、表音文字で表すような場合その表記法は一定していないことがあるからである。

例えば、「二度目」は a-rá-2-kam-ma-aš と書かれるが、a-rá-2-kam-aš や a-rá-2-kam-ma (ara-min-kamaš という発音を示しているのであろう。) と書かれたりする。人名の場合も(外国人、つまりシュメール人以外の場合が多いが)、一定していないことがある(外国人の場合、表音的にあらわされるため)。Da-hi-iš-a-tal/Dah-ša-tal/Dè-iš-a-tal や、i-šà-bar-re/i-šà-bar-re や La-ma-ha-ar/La-ma-har 等である。

これまでは、シュメール語の表記と日本語の表記の共通点を考えてきた。これからは相違点を考えていく。

もっとも重大な相違点は、楔形文字は1種類の文字体系しか用いていないということである。これは3種類(ローマ字を入れれば4種類)もの文字体系を用いている日本語との大きな違いである。

楔形文字の書体は、時代が下がるにつれて次第に簡略化の道をたどり(図6参照)、初期王朝期の頃の文字と neo-assyrian と呼ばれる文

図5

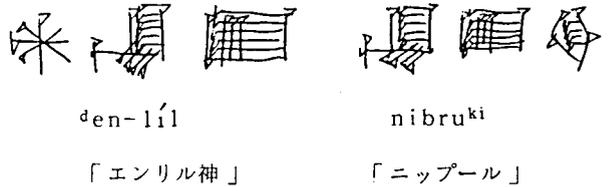
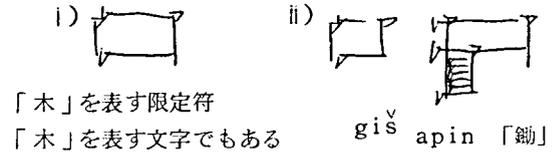
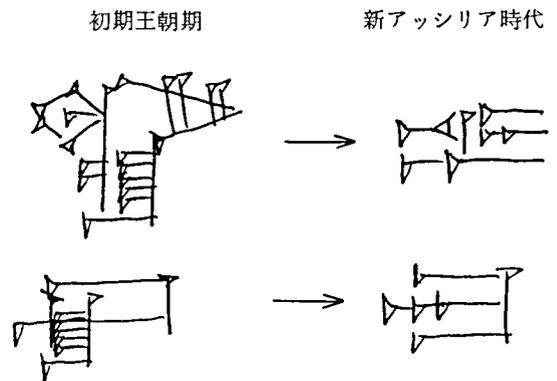


図6



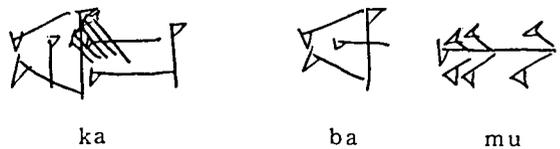
字とはほとんど別な体系の文字と思えるほど異なっている。しかし、これは単に文字の書き方が簡略化されただけであって、日本語のかなのような簡略化された別の文字体系を発達させたわけではない。

確かに、比較的簡単な文字を表音的に用いる傾向が見られるけれども、必ずそうだというわけでもなく<sup>12)</sup>、シュメール人のなかに、「表語用」と「表音用」という2つの異なった文字体系を使用しているという意識があったとは考えがたい。<sup>13)</sup>

次に、同じ文字が表語文字としても表音文字としても用いられることが挙げられる。これは1種類の文字体系しか用いていないということで、当然考えられることである。日本語の場合、かなは、表音文字としてだけ用いられ、表語文字として用いられることはない。漢字は、「当字」のような表音的用法もあるけれども、基本的には音読みであろうが訓読みであろうが表語的に用いられている<sup>14)</sup>。これに反して楔形文字では

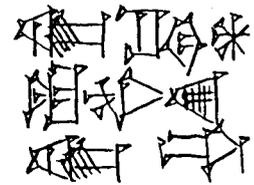
同じ文字が、ある場合には表語文字として用いられ、またある場合には表音文字として用いられるのである。例えば、図8にみられる3つの文字は、表音文字としての音価は左よりそれぞれ、ka, ba, muで、非常に

図8



よく用いられる。しかし、これらは表語文字としても非常によく用いられる文字であって、時には、同じ文字が同じ行に同時に現われ、一方が表語文字、他方が表音文字として用いられている例も見られる。例えば、Entemenaの碑文(Cone A, V. 7)においては(図9参照)、1番めと8番めに同じ文字が見られるが、最初の文字は表語文字「命令」として、後の文字は表音文字 kaとして用いられている。全体としては、

図9



inim-si-sá-<sup>d</sup>nin-<sup>d</sup>gír-su-ka<sup>15)</sup>-ta

「命令」「正しい」神名 格語尾 格語尾

と読み、「ニンギルス神の正しい命令により」の意味になる。

現代の我々は、ある文字が表語文字として使われているか、表音文字として使われているか、判断に苦しむことがあるが、勿論、当時の人々には明白なことであったに違いない。

次に、これはいわば当然のことではあるが、音読み、訓読みの区別はない。シュメール人が楔形文字を発明したというのが定説であるので、この定説が正しいとすれば外国語読み、自国語読み、という意味での音読み、訓読みの区別はありえない。シュメール人から楔形文字を受け継いだアッカド人にはこの区別は存在する。

佐竹は、分ち書きをしないことを日本語の表記の特徴としていた。分ち書きをしないところは日本語と同じだけれども、2・2で少し述べたように、シュメール語では意味のまとまりごとに改行する。意味のまとまりごとに頻繁に改行し、意味をとり易くしているのである。多くの場合、いわゆる文節ごとに改行するのであるから、実質的には分ち書きと同様のことをしているのである。日本語が分ち書きをしない理由として、佐竹(1989)、次のように述べている。

「文字体系の変化部分、平仮名から平仮名以外へと変化する部分の多くが、文節の切れ目と一致する。そして、そうした部分は視覚的にはっきり区別できるわけで、文章を読む立場からすると、言わばそれらの部分の存在が、文を分ち書きするのと同様の役目を果たしていると言える。」

楔形文字の場合は、既に述べたように、1種類の文字体系を表語にも表音にも用いており、そのような効果は期待できないので改行という方法を用いたのであろうと推測される。

図10は、実際の改行の例である。数字は行数を示す。

(4) Urukagina Cone C, I

- ① <sup>d</sup>nin-gír-su      ② ur-sag-<sup>d</sup>en-líl-lá -ra  
 神名                      「戦士」 神名 格語尾 格語尾
- ③ uru-KA-gi-na      ④ lugal  
 人名                      「王」
- ⑤ -lagaš<sup>ki</sup> -ke,      ⑥ é-ti-ra-áš<sup>š</sup>  
 都市名 格語尾 格語尾                      神殿名
- ⑦ mu -na -dù  
 接頭辞 接頭辞 「建てる」

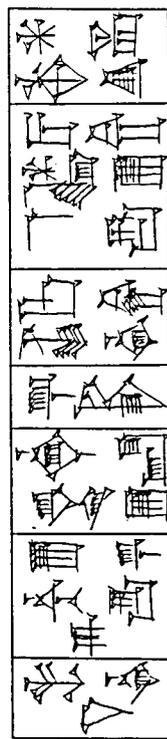
「エンリル神の戦士であるニンギルス神のために、ラガシュの王ウルカギナは、ティラシュ神殿を建てた。」

通常この改行は名詞句ごとに行われるけれどもそうでない場合も時にある、と述べたが、その例を挙げよう。<sup>16)</sup> (図11参照)

(5) Entemena Cone A, V.

- ⑧ inim-si-sá-<sup>d</sup>nanš<sup>e</sup>-ta  
 「命令」「正しい」 神名 格語尾
- ⑨ e -bi <sup>í</sup>digna-ta  
 「運河」「その」 河川名 格語尾
- ⑩ <sup>í</sup>d-nun-š<sup>è</sup>      ⑪ e -ak  
 河川名 格語尾                      接頭辞 「造る」

図10



「ナンジュ神の正しい命令により、その運河をユーフラテス川からイドヌンまで造った。」

日本語は縦書きも横書きも行われるが、シュメール語では横書きである。碑文などで縦書きも見られるが、それは特別であって、初期王朝期以降の行政経済文書ではすべて横書きである。従って、日本語のように、どちらでも良いというわけでは決してない。これは、2・2で述べた楔形文字資料の性質とかかかわっているであろう。実際、自分で試してみると分かるが、粘土に葦のペンを埋め込ませて線を書こうとする場合、横線は容易に書けるが縦線は難しいことが分かる。特に長い線の場合、縦線を書くのは非常に困難で、早くたくさん造らなければならないという行政経済文書の性格を考えると、横書きになるのが自然であるように感じる。

しかし、面白いのは、横書きといってもそれは名詞句単位でのことであって、その名詞句は縦に並ぶのであるから、文単位では縦書きなのである。横書きであるといっても、このことは頭に止めておく必要があるであろう。

## 5 むすび

以上の議論をまとめてみよう。シュメール語の表記法と日本語の表記法の共通点は以下の通りである。

- 1) 表語文字と表音文字の混用が見られること。
- 2) 一つの文字が、多くの読みや意味を持っていること。
- 3) その結果、文字の意味を限定するための送り仮名や振り仮名および漢字の偏に相当する限定符が存在していること。
- 4) 一つの語に、複数の表記法が存在すること。

一方、相違点としては、

- 1) 一種類の文字体系しか用いていない。
- 2) そのため、同じ文字が、表語文字としても表音文字としても用いられている。
- 3) 日本語やアッカド語と異なり、音読み、訓読みの区別はない。(すべて訓読み)
- 4) 日本語と同様、分ち書きはしないけれども、名詞句ごとに頻繁に改行し、意味をとり易くしている。
- 5) 日本語のように横書きでも縦書きでも良いというのではなく、横書きが普通である。しかし、単純な横書きではなく、名詞句単位では横書き、文単位では縦書きという変則的なものである。

といった点が考えられる。

ただし、「シュメール語の表記法」と一口に言ったが、ここで対象とした時期(初期王朝期からウル第Ⅲ王朝期まで)の間でさえも違いが見られるのである。今後、こ

これらの違いのさらに深い分析が現われれば、文字や表記法の本質解明のための一助となるのではないかと考えられる。今後の課題としたい。

註

- 1) 例えば, Shibatani (1987) p. 856 参照。
- 2) 例えば, 山田(1987) p. 370 ff., 金田一(1988) p. 29 ff., 山本(1989) p. 73 ff. 等参照。
- 3) 時期的には, シュメール語がほぼ完全に表記されるようになる初期王朝期以降のシュメール語を扱う。
- 4) アッカド語については, また別の機会に書く予定である。
- 5) 動詞における完了(無標)／未完了(有標)の対立は, 多くの場合接辞によって表されるが, reduplication によるものもある。若干の動詞は補充法により表される。
- 6) シュメール人は独自に表音文字を考えだしたのであって, 犬飼(1989) p. 199に見られるような「表音文字は, 表語文字の異言語への適用を契機として成立した。」という認識は正しくない。膠着的な言語の使用者が文字の発明者であった場合, 表語文字を表音文字に応用するのはむしろ自然ななりゆきではなかったかと思われる。ただし, シュメール人が楔形文字の発明者であるという定説が誤りであれば, そのような考えもでき得る。
- 7) 日本語の「書く」は, 語源的に「搔く」と関係があるが, シュメール語で「書く」は, sar 「植える」である。
- 8) ウル第Ⅲ王朝期になると, コラムも行もない粘土板も見られるようになる。しかし, それは, 線のある「正式な」粘土板に比べ, 「仮の」粘土板であったようである。Yoshikawa(1987)参照。
- 9) 振り仮名は, アッカド語やヒッタイト語と異なり, シュメール語では比較的马レである。Falkenstein (1959) p. 20. は次の例を挙げている。
  - i) èn ba-na-tar<sup>ar</sup> 「彼は尋ねられた。」
  - ii) inim in-na-<sup>gá</sup>gar<sup>ar</sup> 「彼は不平を言った。」i) では, 動詞 tar の後に ar が書かれており, 直前の文字が-ar で終わることを示している。また ii) では, 動詞 gar の前後に <sup>gá</sup>と ar の2つの文字が書かれており, 真ん中の動詞が <sup>gá</sup>-ar と読まれることを示している。
- 10) もっとも, 必ずそう表記されるわけでもない。
- 11) 限定符には前置されるものと後置されるものがある。前置されるものの例としては, 「神」「容器」「葦, 葦製品」「木, 木製品」「河川」「石」「香料」「植

